岡山は世界の楽園である

特定非営利活動法人
ＡＭＤＡ　理事長
菅　波　　茂

昭和には大宅壮一という偉大な評論家がいた。彼は「一億総懺悔」など時流を的確に比喩する名文句を創り続けた。彼は「岡山県民ユダヤ人説」により岡山県人のえげつなさを比喩した。以来、この文句は岡山県人を語る時の定番になった。始末が悪いのは当の岡山県人までがこの文句を信じてしまったことである。嘘も百篇言えば真にあるとの例え道理であった。本当になのか。私は大宅壮一氏に生きていて欲しかった。「岡山県民ユダヤ人説」を撤回して、「岡山は世界の楽園である」と比喩してもらいたかったからである。

「岡山は世界の楽園である」。なぜそう言えるのか。根拠を上げて説明したい。

私は海外医療協力にたずさわって約30年になる。アジアやアフリカを訪れた。多様性に富んだ国々である。どの国にもその国のすばらしさがあった。否定するものではない。それでも日本には汲んでも汲んでも尽きぬものがある。それは水の豊かさである。水は生命の源である。水の豊かさを保障するのは緑である。日本は全島が緑におおわれている。しかも、春、夏、秋、冬という恵まれた四季である。お金では買えないものがあるとすれば、この四季の豊かさなど特筆すべきものである。それだけで「黄金の国ジパング」である。

ＡＭＤＡは緊急人道援助を行っている。特に内戦などによる難民や自然災害による被災民などがその対象である。難民の子どもにとって死亡率の25%が下痢である。すなわち適切な飲料水が手に入らないためである。現在、世界の支援を必要としているアフガニスタンなどは緑地は全国土の数%である。この地の人道援助プロジェクトに参加して岡山に帰ってきたメンバーは岡山の緑と水の豊かさに感歎する。緑が目にしみ、水が口を潤す。

岡山の精神風土は「弱者が死亡の危機にある時にかけつける」ことである。1995年１月17日に発生した阪神大震災のとき県民をあげての救援活動を行った。神戸新聞も社説で突出した岡山県民の救援活動に感謝した。ところが岡山県民は自分たちの行為が突出しているとは思っていなかった。このギャップが岡山の財産である。すなわち、「困った時はお互いさま」という相互扶助精神である。ＡＭＤＡは阪神大震災、サハリン大震災、雲南大震災、インド西部大震災などの被災者に数々の救援活動を行ってきているが、岡山県民の「弱者に対する共鳴」する人道援助の精神とボランティアに支えられてきた。

人の命に不可欠な水と緑。人が支え合って生きていくのに不可欠なのが相互扶助の精神。この両者があるところが楽園とするなら、岡山こそ世界の楽園と言いきることができる。もっと極論を言うならば、岡山の過疎地域といわれている山間部こそ楽園中の楽園である。

世界の楽園である岡山を味わい、岡山にしかできないことを考えるのも一興である。

菅波茂